

## 移行期最終年度の外国語活動の取組について

山口市立二島小学校 辻本紳一朗

来年度から外国語活動の時間数が増え、教科としての外国語が実施されることになる。現場では、期待と共に文字指導やパフォーマンス評価等に対する不安の声が聞かれる。

次年度の完全実施に向け、校長として何ができるかを考え、本校で取り組んできたことをいくつか紹介したい。

## 1 見える化による抵抗感への対応

自分が見よう見まねで小学校の外国語教育を始めた頃から20数年が経つ。おそらく英語活動・外国語活動を経験した管理職は今後どんどん増えるだろう。校長が外国語教育を肯定的に受けとめ、理解するとともに、自らのノウハウを生かし、教師集団が前向きに新しい教育に取り組めるよう、学校全体を上手にリードしていくことが大切と考える。

先生たちには、決して新たな学習が降ってきたのではなく、これまでに小学校教育が積み上げてきた成果や、小学校教員の専門性、そして、その中で子どもが育ってきたことを伝え、次年度からの外国語教育への抵抗感の払拭につなげるようにすると共に、学習指導要領や研修ガイドブックを参考に、先生方からよく尋ねられる質問に対してのQ&A集を作成し、「見える化」への支援をした。

## 2 環境をつくる

外国語活動担当を孤立させず、全校で取り組む空気を醸成していくための支援が大切である。その一つとして、外国語活動担当と連携し、夏季休業中の職員作業として校内にあった絵カードや絵本、音声教材などの教材の再整理を行った。次年度以降にも使えるよう、カードケースや教材ボックスを工夫し、整理する中で、授業づくりのアイデアも生まれたようだ。また、校長だよりを通し、外国語教育の動向について伝えるようにした。



校長室前の掲示

併せて校内にいろいろな英語の表示をした。子どもたちが知っている文字を実生活の中に取り入れることで、授業での学びをつなげるとともに、子どもたちの気付きを引き出したり、興味関心を広げたりする場とした。併せて、校長が夏季休業中に参加したニュージーランド研修から持ち帰った現地の広告パネルを校長室前に掲示した。知っている英語を指さしながら、日本円に換算し、異国の子どもたちの生活をイメージする子も多い。

時数確保のための教育活動の見直しや教材備品購入のための予算確保、人材育成のための研修参加支援なども次年度に向けた大事な業務である。

### 3 つなぐ

小学校教員は中学校での学びを意識し、中学校の学びはより小学校での学びを踏まえたものに変革することが期待される。中学校の英語教員の支援を受けた授業を実践する中で、子どもの学びのつながりを共に考える大きなきっかけになる。本校では、週に1度中学校の英語教員が来校し授業参観及び支援をしてくれている。ここに至るための小中の連携の場として、月に1度、隣接する幼稚園と共に、幼小中園長校長会を本校校長室で開催している。情報交換と共に、12年間の子どもの育ちを共に支える連携アイデアを出し合う場にもなっている。

昨年度、隣接する幼稚園で幼児が英語に親しむプロジェクトが行われた。そこで学びをどう小学校でつなげていくかを考える取組を本校の1・2年生対象に行っている。ゆとりの時間を活用し、月に1～2度程度、ALTの空き時間を活用して低学年の子どもたちが英語に親しむ活動を試行的に行っている。文字を介さず英語にふれ、英語の世界を広げる子どもたちは3年生からの外国語活動への期待感を高めているようだ。この取組は、低学年担任たちの外国語教育に対する意識を高めることにもつながっている。

夏季休業中には、幼小中の教員や学校運営協議会委員が一同に会し、外国語担当によるスモールトークを使ったワークショップを行った。フランクに互いを知る機会と同時に、これからの小学校外国語教育に対する理解を深める機会にもなったようだ。保護者には、学校だよりやPTA総会等での周知に努めてきた。



低学年の活動

### 4 構えをつくる

気軽に英語を話す場づくりとして、月に1～2回、放課後に校長室で低学年担任や職員室にいる教員がALTとフリートークをする時間をもった。ALT来校時に職員室の中に英語が飛び交うような雰囲気づくりにつなげることをねらいにしたものである。

また、外国語担当教員が中心となり、外国語教育に関わる研修を計画的に取り入れている。先日は、スモールトークやクラスルームイングリッシュを中心とした研修を行った。キーワードを使い、即興性のあるやりとりを体験する中で、子どもたちの学びのイメージをもつと同時に、子どもたちのつまづきへの対応を考える機会となった。市教委の協力を得て検定教科書をもとにした校内研修も実施し、次年度の指導の大まかな見通しをもたせるようにした。



校長室での英会話



Small Talkの研修

## 5 夢を持って取り組む外国語教育に

本校では、6年生たちが修学旅行で外国の人たちと慣れ親しんだ表現を使って即興性のあるやりとりを実践する活動を始めている。これに先立ち、今年度は地域在住の外国の方を迎え、事前練習に参加していただくとともに、いろいろなアドバイスをいただいた。これにより、子どもたちは修学旅行で訪れた宮島で、多くの外国の方々と英語を通したコミュニケーション活動をする事ができた。

併せて、今年度から6年生たちがニューヨークの小学生たちとメールを通した交流を実施した。慣れ親しんだ表現を使いながら、文字に思いを乗せて相手意識をもったやりとりを続ける中で、子どもたちは英語で伝え合える喜びを肌で感じていたようだ。

子どもたちと外国語をつなぎ、魅力ある授業を創るため、小学校教員には、これまでに培ってきた子どもを見取る目や学習集団をつくる力をしっかり発揮することが求められる。子どもたちが外国語の授業で学びの意味を実感するためには、教科をまたいで子どもの意識をつなげてきた小学校教員のセンスと専門性が大きな力となる。

教師は、子どもたちの学びの先にある「次世代を担うグローバル人材育成のための大きなプロジェクト」を任されているという自覚と自負をもち、夢をもって外国語教育に取り組んでいけるよう、校長が担うべき役割は大きい。学校現場は忙しいが、学校全体を見渡して、子どもたちにとって大切なものを精選しながら、外国語教育を通して教育活動全体の質の向上につなげていきたい。



地域在住の外国の方を迎えた授業



外国の方とのやりとり